「父母の死」

橋本茂

2002年8月、母が88歳で、2005年9月、父が96歳で、天国に召されました。瞬く間に去って行ったというのが、私の実感です。しかし、二人とも私の夏期休暇中に亡くなり、二人の最後を看取ることができたこと、そして、景勝地にある二人の建てた家で葬式を挙げることができたことは、私にとっては不幸中の幸いでした。

母は手術のため開腹をしましたが、癌の転移がひどく、手の施しようがなく、そのままお腹を縫い合わせて、病院のベッドに戻り、そして、一週間、医療器械に取り囲まれ、酸素吸入器や点滴などの、たくさんの管を体につけ、ベッドに縛り付けられたまま、意識は戻ることなく亡くなりました。結局、手術室に行く母と目と目を合わせて別れたのが最後でした。

母が亡くなった後、父は半年ほど、私たちの千葉のマンションで生活しました。この生活は父にとってはつらかったようです。翌年2003年、私の特別休暇を利用し、私と父は、高知の父の家に帰り、一緒に生活をしました。私の休暇も少なくなり、帰京せざるを得なくなり、父は新築のグループホームに入り、高知に残ることになりました。

父をホームに入所させることになったとき、その責任者と私は面接しました。その時、もと看護師であった彼女は、「私は病院で最後を迎える人を多く見てきました。私としては入所者がこのホームの自分の部屋の自分のベッドの上で最後を迎えるようにしたいと考えていますが、いかがでしょうか」と問いかけてきました。母の病院での最後を見てきた私にとっては、「ホームの自分のベッドで最後を迎えることは父の本望であると思う」と答えました。父は2003年11月、そのホームに入所しました。

2005年の春頃、96歳になった父が元気でなくなったとの連絡を受けました。私は、夏期休暇にはいると、すぐに高知に飛びました。主治医は末期の肝管癌と診断しました。そして、入院を勧めました。ホーム長の彼女と私は、医者の勧めに従って、一時は父の入院を決めました。しかし、しばらくして、ほぼ同時に、彼女と私は入院したらどうなるか、96歳の老人を手術してどうなるかを考えました。手術して長生きするわけではない。沢山の医療機器に取りかもまれ、体には沢山の管をつけられ、痛い思いをしながら、病院の無機的なベッドに縛り付けられ、最後を迎えるだけでな

いだろうか。父も、私たちの動きを察知して、ホーム長の彼女に、「おんちゃんを、このベッドの上で死なせてや」と懇願していました。同じ思いを共有する私たちは父の気持ちをも尊重し入院させないことにしました。その決定に医者は反対しましたが、私の意志が固いことを確かめた後、入院をあきらめてくれました。明治生まれで、戦争で九死に一生を得た父は徹底していました。ホーム長の進める注射も点滴も拒否しました。そこで、主治医は癌の痛みを和らげるためにモルヒネを含む薬を調合してくれました。

父は見舞いに来てくれた人たちに、病人とは思えない明るさで対応していました。誰も余命１ヶ月の末期癌患者とは思わなかったようです。

父の最後は、私たち夫婦と私の従姉弟がホームの父を見舞った直後でした。見舞った時は、父は多少の痛さを訴えていましたが、意識もはっきりし話もしていました。私たちは、午後、主治医に会って話を聞くことにし、昼食のために、いったん帰宅しました。食事中、父の様態が急変したとの電話が入り、急行しましたが、着いたときには亡くなったばかりの時でした。私たちは臨終には間に合いませんでしたが、父は多くの親しかったホームの人々に取り囲まれて、自分のベッドで、天に召されました。

私は父の死を、明治男の見事な往生であったと、悲しいけど、誇りに思っています。父の葬儀は、彼が精魂込めて作った太平洋を見渡せる自宅で、多くの親しい人々にとりかこまれ、私の母教会の牧師の司式で行われました。そして今、父母は、太平洋を眼下に見る墓所に眠っています。

今度は、私たちの番です。どのような死に方をすることになるのでしょうか。

（はしもと　しげる　所長・社会学部教授）